

## 逝去された名誉会員等への追悼文

### 近藤東郎先生を偲んで



- 1925年 9月5日 生まれ
- 1949年 慶應義塾大学医学部卒業  
同大学助手（医学部衛生学公衆衛生学）
- 1958年 同上 専任講師
- 1963年 同上 助教授
- 1969年 三井銀行健康開発センター長
- 1979年 慶應義塾大学医学部教授
- 1991年 同大学 退職 客員教授

去る平成26年の秋に、近藤東郎先生はご逝去されました。その前1年ほどは外出されることが少なくなったとのことを聞き、気掛かりだったのですが、突然の訃報を受け、敬愛する先輩を失った寂しさを痛感いたしました。先生は昭和24年に医学部卒業後、一貫して公衆衛生学、特に産業保健の研究・教育・実践に従事され、大きな足跡を残されました。

私事ながら私も卒業後1年の医学実地修練を経て、昭和35年に同じ教室に入り、公衆衛生学を学ぶスタートを切ることになったのですが、当時教室幹事というお立場にあった先生からは、いろいろと面倒をみていただきました。

その頃、近藤先生は原島教授とともに、主として産業化学物質の毒性に関する実験的研究を行っておられ、私も先生から研究の手ほどきを受けながら、二硫化炭素、ベンゼン、鉛などがウサギの本来持つ解毒機能にどのような影響を与えるかを調べ、共著論文に名前を加えていただいたことを懐かしく思い出します。毒物による潜在的影響の早期発見が当時の研究テーマだったと思います。

教室は衛生学公衆衛生学教室と呼ばれ、教授、助教授、専任講師の定員がそれぞれ2人で、衛生学と公衆衛生学が合併したような形になっていました。研究の内容は化学物質や温熱環境などに関する実験的研究と、工場や一般環境での化学物質による健康障害の疫学研究が主であり、化学物質又は物理的要因による健康障害の予防に関心が集中していました。

しかし近藤先生は研究の軸足を、事務職場など一般的な産業現場における健康の保持増進の課題へと

徐々に移され、その方向への興味の追究も意識されながら、三井銀行の健康開発センター長の職に10年間携われました。当時のご研究としては、「血清 $\gamma$ -GTPの健康診断学的研究」など健康診断に関するものが多いのですが、「若年女子事務作業者のCMI調査について」、「女子銀行員の指尖プレチスモグラムと皮膚温」などのご研究から、女性従業員の健康問題にも高い関心を持っておられたことがわかります。後年（平成15年）のご著書「健康千一夜話」のなかで、ご自身の研究で得たデータを基に、若い女子社員の残業時間を月15時間未満にするべく、奮闘されたことが書かれています。

昭和54年に元の職場である慶応大学の衛生学公衆衛生学教室に教授として帰られた後の主なテーマとしては、「新しい動脈硬化指標の開発と健康予測への応用」に関する研究など、多様な健康マーカーが個人の将来における健康状態の予測にどの程度有効かを明らかにし、それを健康教育に応用することに努力されました。喫煙、飲酒、血圧、肥満度など既に明らかな予測因子のほかに、さまざまな新規マーカーも摸索されましたが、肥満度の指標として腹囲を昭和60年頃にすでに取り入れておられたことは印象深く思われます。

先生は大学を定年退職された年の前後にわたり6年間、日本産業衛生学会の理事長として活躍されました。この学会の主要メンバーは産業保健の実務に従事しつつ研究活動を行う産業医、産業看護職等の方々と大学・研究所等の研究者であり、これら両者の経験を兼ね備えた近藤先生は、学会の代表者として最適任であられたと思っています。

先生のお人柄はいつも明るく、話好きな方でした。私は同じ教室で長く一緒に仕事をさせていただき、9年間ほどは先輩、後輩の二人教授として何の支障もなく、楽しく過ごさせていただきました。座談の名手というか、少し辛口の皮肉を混ぜながらも暖かい人柄のにじみ出るさまざまのお話を、昼休みなどに聞かせていただいたのは、懐かしい大切な思い出です。

近藤先生、本当に有難うございました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

公益財団法人産業医学振興財団  
櫻井治彦